世界の
空と
人をつなぐ

あまみず
amamizu

no.58
April 2012

特集：はじめよう！雨水活用

実践レポート

東京・墨田区 P2
国立市 4
世田谷区 5
宮城・東松島市 6
埼玉・所沢市 7

小特集：東日本大震災と雨水
正しく知ろう、放射能と雨水
福島原発事故による
雨水タンクの放射能汚染調査 8

雨水ネットワーク会議全国大会
2011 大阪→ 2012 東京 10

バングラデシュ・スカイウォーター・プロジェクト 12
すみだ環境ふれあい館 10 周年だより 13
あまみずカレンダー 14

People for Rainwater

特集

はじめよう！雨水活用（あまみずかつよう）

実践レポート

都市に暮らす私たちはその恩恵を忘れ、雨が降れば「悪い天気」と疎んじてしまいます。でも、雨は地球上の生き物に分け隔てなく降り注ぐ「生命の水」。人々の暮らしにも計り知れない恵みをもたらしている存在です。そして「水」に関わる環境やエネルギーの観点で捉えるとき、この「雨」とのつきあい方はとても大切です。今ここに降る雨を、単に流し捨てる、そうしたこれまでの都市型のライフスタイルを改め、「一旦ためて、使う」。それを私たちは「雨水活用*1（p3 Keyword 参照）」と呼び、推奨しています。それは、誰もが簡単にできるエコロジカルな暮らしを実現する第一歩です。

「雨水活用」。言葉に耳慣れない方もいるでしょう。そうしたはじめての人にこそ、ぜひその価値を知ってほしい。今回特集はそんな願いを込めてお届けします。雨水活用を実践する方々の具体的な事例を通して、あなたがはじめるきっかけを見つけてみませんか。（編集部）

防災まちづくりから生まれたシンボル、路地尊（ろじそん）・天水尊（てんすいそん）

東京・墨田区　徳永 暢男さん

1988 年から「路地尊」に雨水活用が組み込まれた。路地の共同井戸のように地域の絆となっている。普段は植木の水遣り、リサイクルの缶の洗浄などに利用し、火事のときは近所の人がバケツリレーで消し止める。

雨水市民の会の前会長、徳永暢男さん、通称「徳さん」は、生まれも育ちも東京の下町、墨田区。今でこそ東京スカイツリーの完成で湧くが、以前から墨田区は雨水活用の先進地として知られている。環境や防災におけるこの地域ブランドを産み出してきたキーマンのひとりが、この徳さんだ。プラスチック加工職人の技を活かし、「路地尊」と「天水尊」の開発や設置に携わり、雨水活用の先駆け・墨田の顔として信望も厚い。

墨田区向島地区は古い木造家屋の密集地帯で、火災の危険度が最上位にランキングされている地域だ。徳さんは、1985 年ころから防災まちづくりの住民活動、「一寺言問を防災のまちにする会*2（通称「一言 (ひとこと) 会」）」に参加し、「路地尊」を生み出した。民家の屋根に降った雨を地下のタンクに溜め、手押しポンプで汲み上げる装置で、区内に 21 基ある。初めて雨水活用をした路地尊は、江戸時代の火事消火のための天水桶をモチーフに、下町になじむレトロなデザインも取り入れた。溜めた水はリサイクル・ストックヤードのビン・缶の洗浄に、農園の水遣りにと、日常的に使われて、まちのコミュニティに役立てられている。路地尊の命名は、路地の安全を守るシンボルとなるようにという願いからである。

また徳さんは、個人の家にも雨水活用を広めたいと「天水尊」を開発した。養魚場で使われるポリエチレン製のブイを利用した 200 ℓ のオリジナル雨水タンクだ。雨を「天水」として尊ぶという徳さんらしいネーミングだが、日本における「個人用」の雨水タンクの始まりなのだという。徳さんは、市民にとって使いやすく低価格で手に入る雨水タンクを多くの事業者が作れば、もっと広がると思った。1994 年に墨田区で開催された雨水利用東京国際会議を契機に雨水利用事業者の会を仲間と立ち上げ、事業者の育成に一役買った。こうした取組みがあって、今では墨田区は、全国に先駆けた雨水活用先進地となっている。墨田区の助成による雨水タンク普及は、区の把握では 289 基（平成 24 年 3 月時点）。徳さんを始め、多くの区民に、雨水活用の意義や必要性が浸透し、活発な活動がされている。◎

個人宅への設置を意図して開発された雨水タンク「天水尊」。（現在は製造されていない。）

*2　向島区域の小学校が災害の拠点となっていることから、第一寺島小学校と言問小学校の学区域である「一寺言問地区」の 6 つの町会と「わいわい会」という有志のグループによって構成される。

実践その 1　身近な事例を見つけよう！

まちで雨水を利用している家やビルを探してみよう。水やエネルギーを大切にし、そして地域にも役立つことに心がける、こんな実践をしている人がきっといるでしょう。そう気付いたらあなたがはじめる上でも心強いでしょう。

横丁の共同井戸のように、路地尊は地域の絆となっている。
図:『やってみよう雨水利用』(グループ・レインドロップス編著、雨水市民の会発行)より

誰もがはじめられる手軽な活用を

東京・墨田区　高原 純子さん

雨水はきれいで植物にも優しい。子どもたちにもっともっと雨水活用を体験しもらいたい。そんな思いが募るのは、同じく一言会のメンバー、高原純子さん。主婦の感覚で手軽に設置できる雨水タンクの普及をと、地元のイベントに参加したり講習会などに呼ばれては、ポリタンクで簡単に作る雨水タンクを披露し、雨水活用を身近にする活動を続けている。

雨水タンクのシステムも、自前で取り付けることも、それほど難しいことでない。けれど、都会に住む人は設置を水道屋さんなどに頼むものと思い込みがちで、二の足を踏んでいるのでは？素人でもやってみると難なくできるし、その結果、雨水を溜めて使ってみた人は「流してしまうのはもったいない！」と、決まって言うのだとか。それは元々は雨である水が、水道管から無制限に一方的に供給されているような錯覚から、有限な水だが巡り巡って使える環境資源であることの実感につながるのではないだろうか。手作りタンクの実践は、その水の価値やありがたみを体験によって気付かせてくれるもの。高原さんはその良さを、伝導しているのだろう。◎

keyword

[*1] 雨水活用　あまみずかつよう

「雨水利用」という言葉を「雨水活用」と改めて使っている。雨を溜めて利用する雨水利用の歴史は、少なくとも3,000年前からエジプトや古代メソポタミア等で飲料水や農業用水を確保するために行われていたという。日本では、沖縄や三宅島などの島嶼で現在も利用されている。しかし、「利用」という言葉は、人間の利益になるために使うという意味で、人間本位の発想ではないか。一滴一滴の雨が生命の根源であることに思いをはせ、自然に謙虚であるべきだから雨水を活かして使わせていただくという意味で、近年、雨水市民の会や建築学会等では、あえて「雨水活用」という言葉を使っている。英語でも rainwater utilization と rainwater harvesting という言葉がある。(参考:『雨を活かすーためることから始める』(辰濃和男・村瀬誠著・岩波アクティブ新書 2004 年)

実践その２　タンクを手作りしてみよう！

高原純子さん提案・実践の方法を紹介！

ポリバケツでつくる　カンタン！雨水タンク

雨を溜めるしくみはシンプルで、日曜大工の感覚で雨水タンクを手作りすることができます。一度、試しに作ってみませんか。材料は５、６千円ほどでホームセンターなどで揃えられます。

●用意するもの

蛇口

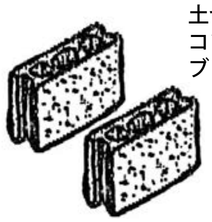
給水用ソケット

パッキン２枚

レインキャッチャー
(500 円で市民の会事務局にて販売)

45ℓ ポリバケツ

水道用ホース



土台用コンクリートブロック２個

●工具

きり、プラスチック用カッター、ヤスリ

●作り方

① 蛇口を取り付ける穴を開ける。ポリバケツの底から約 10cm のところに、蛇口のパッキンの内側で印をつけ、きりとカッターで丸く穴を開ける。ヤスリで形を整える。

② 開けた穴にパッキンを付けた蛇口を差し込み、取り付ける。バケツの内側にもパッキンを付ける。バケツの内側から給水専用ソケットを回して蛇口を固定する。(図 1)

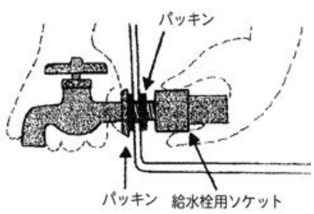


図 1

③ 雨を集める縦樋にのこぎりで切り口をいれ、レインキャッチャー(スプーン形の部品)にホースを付けて差し込む。(図 2)

④ ポリバケツのフタや、本体の上部にホースの大きさの穴を開け、ホースを差し込む。(写真 1)

図 2

⑤ バケツ本体の上から 5 〜 10cm のところにオーバーフロー用の穴を明け、ホースを差し込む。(写真 1)

⑥ 蛇口までの高さが 30cm 程度(如雨露に入れられる高さ)になるように、ポリバケツの下にコンクリートブロックを 2 個程度置き、調節する。→完成！

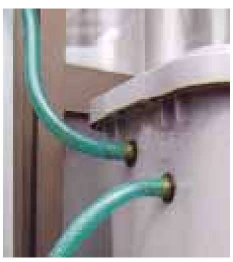


写真 1
④(上のホース)樋からの取り入れ
⑤(下のホース)オーバーフロー

完成例

はじめよう！
雨水活用（あまみずかつよう）
実践レポート

市民のアイデアで活用されるリサイクル容器 行政・企業・市民の協働で広がる「雨タン」ライフ

東京・国立市　谷口 淳一さん

国立市役所の駐輪場にある「雨タン」のサンプル。青が雨タン１号（200ℓ）。横置きにしている灰色が136号（100ℓ）。136号は１号のオーバーフローを貯めている。

国立市では、雨水活用を手軽に始めてもらうため、市民を対象に雨水タンク「雨タン」を無料で配付している。きっかけは、「国立市水の懇談会」*3 のメンバーに、地元にある（株）ヤクルト本社中央研究所が参加していたことにある。裾野市の工場で月に２～３個出る空の容器を破砕してリサイクルに回していたが、「このタンクを雨水タンクに使えるのでは？」と提案され、国立市はそれを受け、2006 年から「雨タン」用容器として市民に配付を始めた。*4

容器は無料配付だった。しかし、ポリプロピレン製の容器（200ℓか 100ℓのいずれか）を自分で市役所へ取りに行かなくてはならない。運ぶには車、加工・設置には日曜大工の心得と道具が必要だ。これではせっかくの容器の配付が先細りになってしまうのではないか？当懇談会に参加する谷口淳一さんは、その容器を運搬したり加工したりするサポートが必要なのでは？と考え、雨水活用お助けボランティア「雨タン友の会」を立ち上げた。「雨タン」容器は、平成 22 年度末までに 156 個が提供された。その雨タンを設置した家をいくつか案内していただいた。

市が配付を始めてまもない頃、雨タン 16 号を設置したのは中原修さん。導入のきっかけは、1995 年の阪神・淡路大震災以降、推進された自主防災組織の活動にあるという。消防署出身だった当時の市長は、町会単位の自主防災に力を入れた。中原さんは当時町会の自主防災組織の部長を担っており、初期消火や災害用水に雨水を利用するため、タンクを地域に配備することを積極的に進めた。部員は廃物利用で部品を調達・加工し、希望者宅に無料で設置した。現在、町会にある約 30 個の雨タンが、こうした互助を基本とする活動があって進められたとのエピソードをうかがえた。

成田さん宅の雨タン166号。雨どいからタンクに入る前に古いストッキングでゴミとりをしている。

2011 年に雨タン 166 号を設置した成田順子さん。庭の家庭菜園のために雨水を使ってみたいと「雨タン友の会」のサポートを得た。最初は菜園の水やりにだけ使っていたが、収穫した野菜の水洗いにも使いたくなった。タンク回りの地面にタイルを並べ、美しく機能的に整備された庭の一画を喜んでいた。雨水でたっぷり水やりをしつつ、（水道水を）「浪費していた頃の罪悪感が減った」という。

最後に、谷口さんも参加している有機農業体験農園を拝見した。立派なブロッコリーや白菜が育つ脇に、小さな納屋。１坪弱のこの屋根からも、チェーンを使い水やりのための雨水が引き入れられていた。「これでも結構たまりますよ！」と谷口さん。

ガチャポン（手押しポンプ）を付けた雨タン２号の説明をする谷口さん。子どもたちがガチャポンに届くよう容器を半分埋めている。２階に置いたポリバケツで一旦雨を受けゴミを取り除く工夫もしている。

きっかけはさまざまだが、こうした市民の活動に支えられ、国立市の雨水活用が豊かに発展している様子をうかがえた。「雨だれの落ちるところにバケツを置くだけで始められます。」雨水を溜めて使う喜びの実感が伝わる訪問となった。◎

*3 国立水の懇談会：国立市は、水と緑の豊かな学園都市であり、湧水や水問題に関心が高い市民も多い。国立市が水循環基本計画を策定するにあたり、市民、事業者、学識者などを中心に同会を設置し５年間の調査を経て市に提案を行い、それを基に 2009 年に水循環基本計画が策定された。

谷口　淳一　Taniguchi Junichi
雨水市民の会会員。1963 年東京生まれ。雨水利用を始めて「雨の日もいい天気」であることに気づく。現在，国立市嘱託員。

*4 国立市役所雨タン用空き容器の配付ホームページ：http://www.city.kunitachi.tokyo.jp/sumai/005145.html

実践その3 助成制度を調べてみよう！

あなたのまちの自治体でも、雨水利用のための支援制度があるかもしれません。雨水活用の推進のため、タンクを導入するために行政が助成金を出す自治体が増えてきています。ぜひ、制度を活用してみましょう！

雨水利用先進自治体、東京・墨田区では、１トンより小さいタンク設置の場合、雨水タンクの価格の２分の１を助成、大きな容量のタンクにも容量に合わせた助成をしています。タンクに対する助成の他にも、不要となった浄化槽を雨水タンクに転用したり雨水浸透に助成金等の支援をしている自治体もあります。「雨水利用自治体担当者連絡会」に参加する 132 の自治体（平成 22 年６月現在）の一覧もご参考に。ウェブ上に掲載されている。http://www.city.sumida.lg.jp/sumida_info/kankyou_hozen/amamizu/zititai/meibo.html

TOKYO Setagaya

太陽光で動く雨水活用システム サバイバルにも強いエコハウス

東京・世田谷区　建築家・神谷 博さん

台所のシンクに３つの蛇口（左が浄水器を通した雨水専用の蛇口、真ん中が水道の蛇口、右がアルカリ水が出る蛇口）

エコ建築家・神谷博さんの住まいは、雨水活用、太陽光発電、太陽熱温水器、緑化といった環境技術がふんだんに使われ、既存のインフラへの依存をできるだけ少なくしている。

溜めた雨水を多様に活用

神谷邸の雨水活用システムは２系統に分かれる。１つは雨水を庭に設置されたタンクにためて、ビオトープの水循環や、庭の散水に利用するシステム。

そしてもう１つは雨水を駐車場の地下にある２槽の貯留槽にため、これを庭木の水やりや洗濯、野菜・食器洗い、それに緊急時のトイレの流し水に利用するシステム（図１参照）。このシステムでは、野菜や食器洗いにも雨水を利用するために、台所の流しに雨水専用の蛇口が設けられているのが特徴的。また、洗濯や台所用には雨水に加えて、昔からあった井戸水をポンプでくみ上げ、浄水装置を通して利用するといった工夫もされている。

「雨水の水質はよく、にごりもほとんどありません。大気中の汚れを含む降り始めの雨はカットし、貯留槽には取り込みませんし、貯留槽に入っても汚れは自然に沈殿し、上澄みのきれいな水だけを汲みあげて使っていますから。軟水なので洗濯物の汚れもよく落ちるし、非常時には浄水器でろ過すれば飲用としても使えます」と神谷さん。

庭の地上設置型の雨水タンク（0.5㎥）。雨水は屋根から樋を伝ってこのタンクにたまる。蛇口はタンクの下方についている。

太陽エネルギーと組み合わせて

両システムとも雨水くみ上げのポンプには独立系の太陽光発電による電気を使っているのも特徴だ。系統連係型ではなく、独立系にしたのがポイントで、これなら停電になっても心配がない。太陽光で発電した電気は直流。これで家庭用電気機器を動かすには交流に変換しなければならないのだがが、用途によっては直流のままの方がよい場合もある。直流のポンプは日中、発電量が多く回転が速い。しかし、暗くなるにつれて回転が遅くなる。ビオトープの水循環にはこうした自然のリズムが合っている。「自然エネルギーは分散型で身近な分、自分でコントロールする必要があります。自然に対する知識を持ち、使いこなす楽しさをぜひ、感じてほしいですね」と神谷さんは熱く語る。

樋につけられたBISY社製の初期雨水除去フィルター

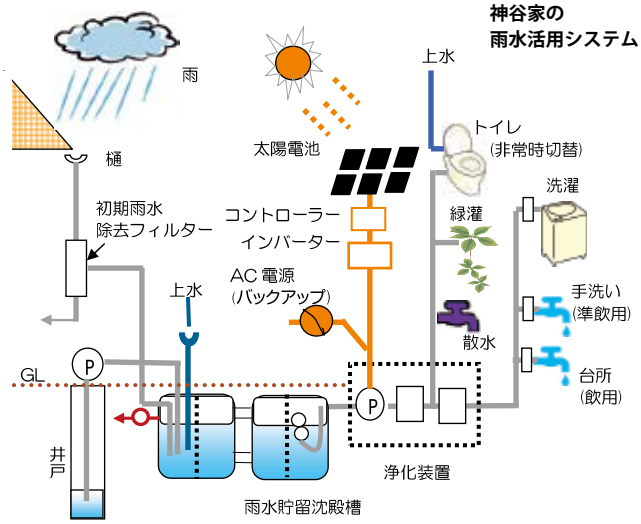
災害時にもってこいのエコ調理器

雨水利用以外にも災害時に威力を発揮してくれるものが神谷邸の庭にあった。それはアースオーブンだ。ビオトープを掘った時に出た土に石灰クリームを混ぜて練り、丸めた泥団子を積みあげて作ったもの。燃料には、庭木の剪定で出た枝を２年ほどよく乾かして使う。このオーブンで焼いたパンやピザ、トウモロコシは実に美味しい。かまどもセットで作っておけば、災害時にガスや電気が使えないときに重宝すること請け合いだ。

水道、電気、ガスが止まってもびくともしない神谷邸の設備を拝見して、エコハウスが環境に負荷をかけないだけでなく、災害時のサバイバルにも役立つことを実感した。巨大地震発生の高い可能性が騒がれる今日、こうしたエコハウス技術が広く知られ、都会の住宅に浸透していくことを願わずにはいられない。◎

庭先にある自家製アースオーブン。

神谷家の雨水活用システム



あなたの家に本格的なエコシステムを導入してみよう。もし、あなたが家を作る（改築する）なら、エコライフを満喫できる家にしてみませんか。雨水活用などのエコ技術に詳しい専門家に相談してみましょう。自然が身近に実感できる暮らし方が楽しめます。

雨水活用のエコ建築については、雨水利用事業者の会（HP:http://amamizu-pro.net）に問い合わせができる。また、参考書として「やってみよう雨水利用」（グループ・レインドロップス編著、雨水市民の会発行）、「日本建築学会環境基準AIJES-W0002-2011雨水活用建築ガイドライン」（（社）日本建築学会発行、本冊子P15参照）などがある。

実践その4 本格的なエコハウスを建てよう！

はじめよう！ 雨水活用（あまみずかつよう） 実践レポート

2011年7月、『雨水活用建築ガイドライン』を出版した日本建築学会雨水建築普及小委員会。その後に、東日本大震災の被災地支援を雨水活用で実践しようと、宮城県東松山市野蒜地区に入った。メンバーの屋井さんから活動をレポートしてもらった。

雨水タンク設置風景

被災したまちの再生に雨水活用の支援

宮城・東松島市

寄稿：日本建築学会雨水建築普及小委員会
屋井 裕幸（雨水貯留浸透技術協会 技術第二部長）

自然エネルギーでまちの再生を

壊滅的な被害を受けた宮城県東松島市野蒜地区では、地域コミュニティの再生に向け、NGO*6の支援を受けて太陽光発電装置（20世帯）や太陽熱温水器（2世帯）を住民自らの手で設置していました。私たち日本建築学会雨水建築普及小委員会はこの話を聞き、地区リーダーの坂本雅信さん等に雨水タンクの設置を提案し、結果、地区内20世帯の賛同を得て、実施が決まりました。2011年8月12日、有志4名が竪樋の形状や設置場所についての現地調査を行い、9月11日、地元の方の協力を得ながらの設置を行いました。

断水の経験から雨水活用を

野蒜地区は、東松島市の南西部、奥松島の近くに位置します。海岸に近い低地の住宅は、津波で全壊。仙石線から山側においては、全壊もしくは1階部分が流失した家屋や、また大きな損壊を免れても1階部分が津波により浸水した住宅も多数ありました。仙石線の線路や野蒜駅も被害を受け、復旧のめどが未だ立っていません。被災後、かろうじて家が残った野蒜駅周辺の住民たちは、坂本雅信さんの家を活動拠点（新町区野蒜駅裏本部）に、“生かされた命を大切に、お互い助け合い、共にガンバロー”の合言葉で、コミュニティの再生に取り組んできました。電気は2～3週間で復旧しましたが、水道が使えるようになったのは4月下旬。トイレを流すことも容易でなく、生活用水の確保のため、給水ポイントまで車で往復1時間以上かけての“水汲み”が日課。そうした日々が1ヶ月半の長きに亘ったそうです。

雨水タンク12基設置を終えて、皆で一息。左手前が筆者。

皆で雨水タンクの取り付け

タンク22基（100～220ℓ）と取水装置等の付属品は、（雨水活用建築製品便覧（p15参照）の掲載企業の）タンクメーカー7社から無償で提供して頂きました。樋から取水する器具と各家の縦樋との適合性を考慮の上、設置するタンクの容量のみを地元の方に事前に決めて頂き、9月11日に雨水建築普及小委員会及び雨水タンクメーカーの総勢8名に加え、ボランティアや地元の方も多数参加して、和気あいあいの中、設置や維持管理に関する指導を兼ねながら12基を取りつけました。取り付けできなかったタンクは、その後、地元住民、東北文化学園大学の岡田先生やその学生らの手により、新築後に取り付ける1基を残して10月2日に設置を完了しています。貯留した雨水は、庭木への散水、畑への灌水、屋外での手洗いに使用されているようです。今後、使い勝手や水質などの雨水利用状況に関するアンケート・ヒアリング等の調査を実施したいと考えています。◎

*6 NGO「つなぎ・ぬくもりプロジェクト」の支援を受けての実践された。このNGOでは東日本大震災の支援を被災地に太陽光発電やバイオマスなどで電気やお湯を届ける活動をしている。ウェブに東松島市野蒜地区のレポートが掲載。htttp://tsunagari-nukumori.jp/archives/711

実践その6 みんなでエコなまちをつくろう！

東日本大震災からの復興は、これまでの私たちのライフスタイルを見直す良い機会でしょう。復興のまちづくりでは、町内・地域ぐるみでエコを推進し、ぜひ、雨水の貯留、浸透、利用を仕組みの中に取り入れましょう。水を有効活用し、省エネルギーで水循環の豊かなまちは、ヒートアイランドを緩和します。そして都市型洪水防止など、災害にも強いまちになるでしょう。

雨と仲よくくらしてみよう！

普段から雨を溜め、庭の水遣りやトイレの洗浄に利用する。単純なことですが、節水・省エネのため、防災のため、地域コミュニティのため、と利点は数々あります。まず、雨を集めてみると、こんなに集まるのかとおどろくでしょう。また、使ってみると、雨がとてもきれいなものだと感じるでしょう。四季折々の雨を意識して暮らすと、いろいろな雨音の楽しみは詩的な心を開いてくれるでしょう。

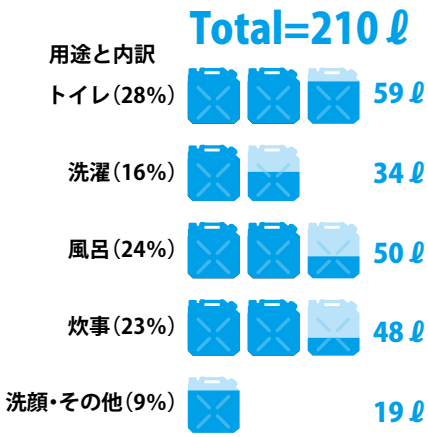
昨年の3.11東日本大震災では、被害にあったまちの再生、原発事故による放射能汚染、そして原発に頼りすぎるエネルギー政策等において、私たちのこれまでの価値観を見直さなくてはならないことは誰もが自覚しています。社会の仕組みや経済の建て直しなど、根本的に大きな課題を変えてゆくのには時間もかかるかもしれません。でも、市民一人ひとりからでも、今日からささやかながら始められる実践もあるはずです。その一つとしての「雨水活用」にぜひ取り組んでみてください。（編集部）

排水を有効活用する家庭用「中水」システムで、3分の1節水を達成！

埼玉・所沢市　安藤 勝治さん

街の発明家の顔を持つ安藤さん。例えば、こよなく愛するサトイモ（育成にとても沢山の水を必要とする）のプランター栽培を実現するために、自動散水システムを開発するなど、これまで、雨水活用に関する独自の装置を数々開発しては、試行錯誤を繰り返している。

今回は、その安藤さんがご自宅に自ら開発し取り入れた中水システムを紹介する。安藤さんのそもそもの発想は、飲み水並みの水質の雨水をトイレに使うのはもったいないという想いだった。またよくある雨水のトイレ水への活用では１t以上の大型タンクが必要とされている。安藤さんは、猫の額ほどの庭しかない日本の住宅事情でも、中水道*5を何とか実現できないものかと考えた。日常、風呂と洗濯に使う水は、トイレに使用する水の量より多い。常時使うこの水をトイレに回せるようにしたら、貯留用には大きなタンクがなくても十分まかなえるのでは…。そんな発想から、7年間の試行錯誤の結果、手作り（材料のほとんどは100円ショップで購入）で「中水」システムを作り稼働させている。



1人が1日の生活に使う目的別の水量（4人家族の場合）

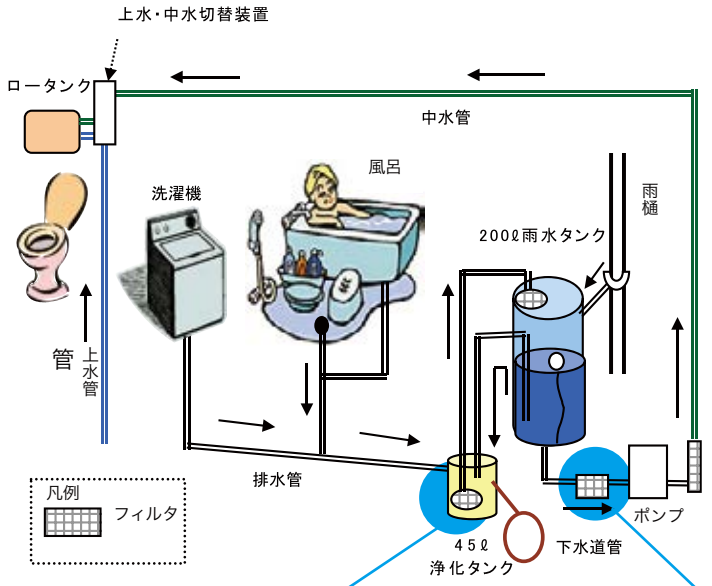
東京都水道局「平成21年度生活用水等実態調査」及び「平成18年度一般家庭水使用目的別実態調査」より計算

洗濯と風呂の排水を一端タンクに貯めて、1日300ℓ以上を必要とするトイレに使いたい。するとタンクはどのくらいの容量が必要なのだろう？一般的な家庭では、洗濯と風呂は時間帯をずらしながら使用するから、200ℓのタンクでも充分いけるのではないか。安藤さんはそう考えてシステムを作った。

風呂の後の湯は半分くらい洗濯に利用する。さらに残った水、洗濯に使った水は、①どちらもまず地下に埋めた45ℓタンクに送り、ここで目が荒いフィルターを通す。②ポンプアップし、200ℓ雨水タンクへと合流・貯留する。③タンクの高い水位から取水し、目が細かいフィルタを通し、ポンプでトイレのロータンクへ送り、トイレ用に使用する。このシステムは、中水に混じるゴミによる目詰まりを防ぐために、①一番汚れやすい45ℓのタンクを、サイフォンの原理を応用して雨水により自動洗浄する、②洗濯には液体石けんを利用する、③フィルターの目詰まりを管理する、といくつかの工夫の結果、順調に機能している。

こうして安藤家では、雨水活用も取り入れた手作りの中水システムを完成させた。その結果、水道水3分の1の節水が実現しているという。

安藤家の雨水浄化・中水道システム



45ℓ浄化タンク　風呂と洗濯の排水はまず、45ℓのタンクに入る。ネットでゴミを取り除き、200ℓ雨水タンクへ。

フィルタ　雨水タンクでは沈殿物の影響を受けない水位の中ほどから目の細かいフィルターを通して、トイレのロータンクに導かれる。

*5中水道：生活排水などを処理して雑用水として利用するシステム。上水道と下水道の中間という意味。gray waterとも言う。

問い合わせ：
（有）安藤電気製作所
www.amamizu-kun.co.jp/

「雨水活用のシンボル さかさかさ」の 雨水初心者マーク

表紙の撮影と記事に使ったマークはこの特集のために作ったパロディで、実際に使われているものではありません。ですが…これからそんな初体験者が増えて、雨水活用の普及が進むことへの想いを込めてみました！

表紙の写真

「はじめての家庭用雨水タンク」の後方には国内最大級の雨水活用施設としての顔も持つ「東京スカイツリー」。
撮影：2012.4月
すみだ環境ふれあい館にて

実践 その6

潤いある雨水生活を…

昔の人は、井戸の水を汲んで顔を洗い、そのあと拭き掃除の水に、そして最後は水やりして大地に戻すなど、水を大切に使っていました。温故知新。現在は、安藤さんのように中水システムを作るほどの「こだわり節水」につながるでしょう。雨を溜めて、利用して、最後は大地に浸み込ませることが当たり前。そんな暮らしは、１滴１滴の雨の恵みをありがたく感ずるエコで潤いある「雨水生活」です。

小特集
東日本大震災と雨水
正しく知ろう、放射能と雨水　～第２弾

3.11 東日本大震災の翌日から４日間に福島第一原子力発電所が続けて水蒸気爆発を起こし、東北、関東にかけて放射能を含む塵や雨が降って、高濃度の放射能汚染がありました。広い範囲にわたって汚染による健康被害が懸念されています。雨水活用の普及をめざす当会としては、放射能による影響を正しく知って、もし問題がある場合は対策方法を伝えることが使命であろうと考え、雨水活用の放射能について大変貴重な調査をされた福井工業大学の笠井利浩准教授（会員）に寄稿していただきました。

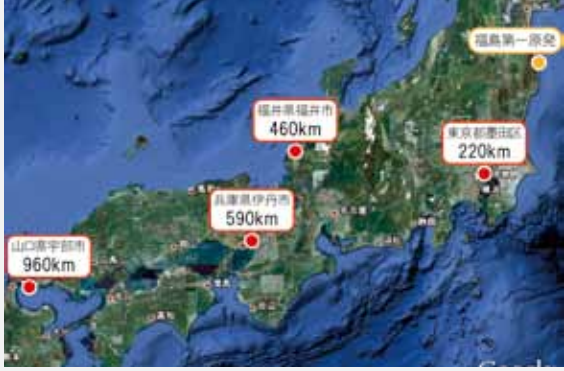


図１　福島第一原発と雨水試料採取地点の位置関係（背景地図、Google Earth）

福島原発事故による雨水タンクの放射能汚染調査 ～調査結果と雨水活用の安全性～

寄稿：福井工業大学　准教授　笠井 利浩

確かな情報が知りたい

福島第一原子力発電所事故を知って第一に心配したのは原発周辺地域の住民への健康被害であったが、ニュース番組で報道される水蒸気爆発の映像を見て、広範囲にわたる放射能汚染が問題になると感じたことを今もはっきりと憶えている。雨水活用に関する研究の一環で、私自身も福井市内の公共施設に設置されている 2m³ 程度の雨水タンクの管理を行っているが、原発事故後の６月中旬の定期メンテナンスの折、ふと気になって雨水タンク内の雨水と底質泥の放射性物質の分析を行った。この分析は、私の勤務先にある国内では数少ない原子力関連の学科 (原子力技術応用工学科) の先生の協力を得て行ったものであるが、残念ながら福島原発から約 460km 離れた福井市の雨水タンクからも原発事故由来の放射性物質が検出された。国や関係機関による「直ちに健康被害はありません」との発表は正しいものであるとは思うが、長期的な影響についてはメカニズムも複雑で把握しきれないことは明確であり、その基礎データの蓄積の一つとして雨水タンクの放射能汚染調査を行うことを決心した。

ここで紹介する研究内容は、意義ある雨水活用の普及が放射能の懸念によって停滞されることがないように、既に雨水活用している方々やこれから始めようとする方々に対して雨水タンクの放射能汚染に関する正確な情報を提供し、安心して雨水活用するための一資料を提供するものである。

雨水タンクの放射性セシウムは底質泥に吸着される

今回、雨水タンク内の放射能汚染調査を行った地域は４箇所、6 つのタンクであり、東京都から山口県の範囲で行った (図 1)。雨水タンク内の雨水と底質泥を採取した時期は、この実態調査を始めるきっかけとなった福井県福井市の試料以外は 8 月中旬である。これらの雨水タンクは全て個人レベルで管理できるサイズのもので、協力頂ける方々に依頼してできるだけ広い範囲から採取した。なお、各試料中の放射性物質の分析は、大学内にある放射能分析装置で、1 試料あたり 12 ～ 24 時間の十分な時間をかけて行った。

放射性ヨウ素については半減期が短い (約 8 日) こともあり、事故後時間が経過していることから全ての試料で検出されなかった。しかしながら、底質泥中の放射性セシウム (以後 Cs と略記) 濃度は福島原発からの距離に応じて減少している。最も大きな値を示したのは東京都墨田区の「I 氏宅」の底質泥であり、Cs134 と Cs137 の合計で約 7,100Bq/kg となった。この濃度は、放射性廃棄物 (8,000 ～ 100,000Bq/kg) に関する環境省の方針 (平成 23 年 8 月 31 日) に相当する値に近いものである。一方、同じ墨田区内の「区内タンク」の底質泥中の Cs 濃度は「I 氏宅」の 1/4 以下であった。この違いは、雨水の集水面である屋根の状態の違いによるものである。「区内タンク」の屋根は平面状で、縦樋口周辺にはこれまでに降り積もった大気中の土埃などが堆積して潅木が生えていた。雨水中の Cs は、この堆積物で簡易的にろ過または吸着され、結果的としてタンクへの Cs の流入量が減少したものと考えられる。区内タンクの屋根形状と比較して、「I 氏宅」の屋根は一般的な三角屋根であり、集水経路に堆積物がほとんどないことを考えると、「I 氏宅」から採取した試料は東京都墨田区の標準的なものとして考えることができる。福島原発から遠い他地域の試料では、近畿圏の底質泥から 100 ～ 110Bq/kg、さらに遠方の山口県宇部市の底質泥からも 10Bq/kg 程度の Cs が検出されている。これらの値は健康被害の面では全く気にする必要のない程度のものであるが *1、これほどの遠方にまで福島原発事故由来の放射性物質が拡散していることが分かる。

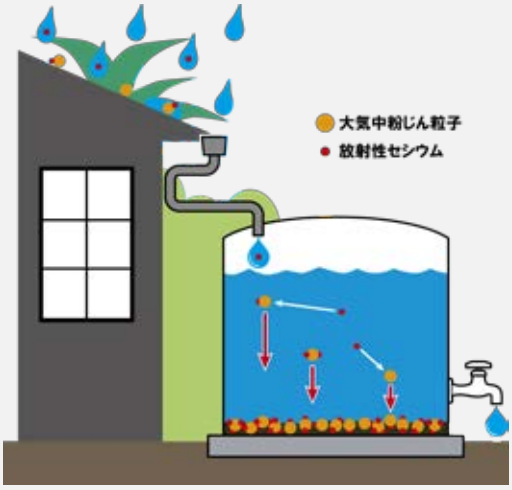


図２　雨水タンク内における大気中粉じんによる放射性セシウムの吸着・沈殿の様子

雨水タンク内の雨水については、ほとんどの試料で不検出 (今回の分析では概ね 0.1Bq/kg 未満) であった。これは、粘土や土壌が Cs を強く吸着する性質によるものであり、大気中の粉じん (黄砂の様な微細な土壌粉をイメージして下さい) と共に雨水タンクに流入した雨水中の Cs が粉じんに吸着され、やがて底質泥としてタンクの底に沈殿するためである (図 2)。これは土壌や粘土への Cs の吸着に関する過去の研究から

*1：身の回りには自然由来の放射性物質を多く含むものもあり、例えば花崗岩(御影石)にはCs以外の放射性物質が数10～1,000Bq/kg程度含まれている。

採取地域	試料名		タンク容量（m3）	採取日	供試量（g）	放射性核種濃度（Bq/kg）福島原発事故由来 Cs134	Cs137	I131
東京都墨田区	I氏宅	雨水	9	2011 8/18	329	1	1.8	ND
		底質泥			407	3270	3840	ND
	区内タンク	雨水	5		323	ND	ND	ND
		底質泥			391	743	882	ND
	M氏事務所	雨水	0.2		321	6.4	7.3	ND
福井県福井市	公共施設（6月）	雨水	2	2011 6.18	342	ND	ND	ND
		底質泥			562	55.2	57.5	ND
	公共施設（9月）	雨水		2011 9.10	324	ND	ND	ND
		底質泥			565	15.7	17.9	ND
兵庫県伊丹市	N氏宅	雨水	3	2011 8.12	322	ND	ND	ND
		底質泥			321	42.7	51.5	ND
山口県宇部市	M氏宅	雨水	0.3	2011 8.13	322	ND	ND	ND
		底質泥			191	3.6	4.3	ND

ND:Not Detected(不検出の意味、検出限界下限値は概ね 0.1Bq/kg)

表 1　各地域における雨水および雨水タンク内底質泥に含まれる原発事故由来放射性核種の分析値
（笠井ら (2011)：福島第一原子力発電所事故による雨水活用装置内の放射性物質による汚染の実態調査，日本雨水資源化システム学会第 19 回研究発表会講演要旨集，pp.67-71）

も明らかであり、一見不必要な存在である雨水タンク内の底質泥が放射性物質の除去に役立っていたということになる。また、一部の雨水タンクの雨水からは Cs が検出されているが、東京都墨田区「I 氏宅」の雨水試料は長期間放置しても沈殿しにくいほどの微細粒子で薄く着色しており、Cs の沈殿が不完全であったためと推測される。また、同じ地区の「M 氏事務所」の雨水試料は雨水としては最も Cs 濃度が高かったが、この雨水タンクには底質泥がほとんど溜まっておらず雨水中の Cs が吸着されなかったためと考えられる。

事故後も放射性物質が飛散している

福井県福井市の雨水タンクは私が管理していることもあり、6 月と 9 月の 2 度分析を行っている (表 1)。6 月の試料採取直後にはタンク内を完全に洗浄しているため、9 月の試料には事故直後に飛散してきた Cs は含まれていない。両者の Cs 濃度を比較すると、事故後の飛散量は数分の 1 程度に減少しているが一度土壌表面などに沈着した Cs 等が再度風で舞い上がるなどして少しずつ飛散範囲を拡大し続けていることが推測される。

安心して雨水活用するためには

今回行った雨水タンクの放射能汚染調査の結果は以下のようにまとめられ、高濃度汚染地域 (図 3 の文部科学省による航空機モニタリング測定結果で青 (30-60kBq/㎡) ～赤 (3,000kBq/㎡) で表現された地域) 以外では、比較的安心してこれまで通り雨水活用しても問題ないと考えられる。

1. 雨水タンク内の雨水には、ほとんど放射性物質は含まれない。
2. 雨水の流入などによる底質泥の巻き上げがない限り、飲み水などの人が直接摂取する用途以外では比較的安心して雨水活用できる。
3. 雨水タンク内では、主な放射能汚染物質である Cs はほぼ全量が底質泥に吸着される。従って、地域によっては底質泥の放射性物質濃度が非常に高くなるため、降水時に雨水タンクに流入する雨水による底質巻上げが起こらないような対策が必要である。

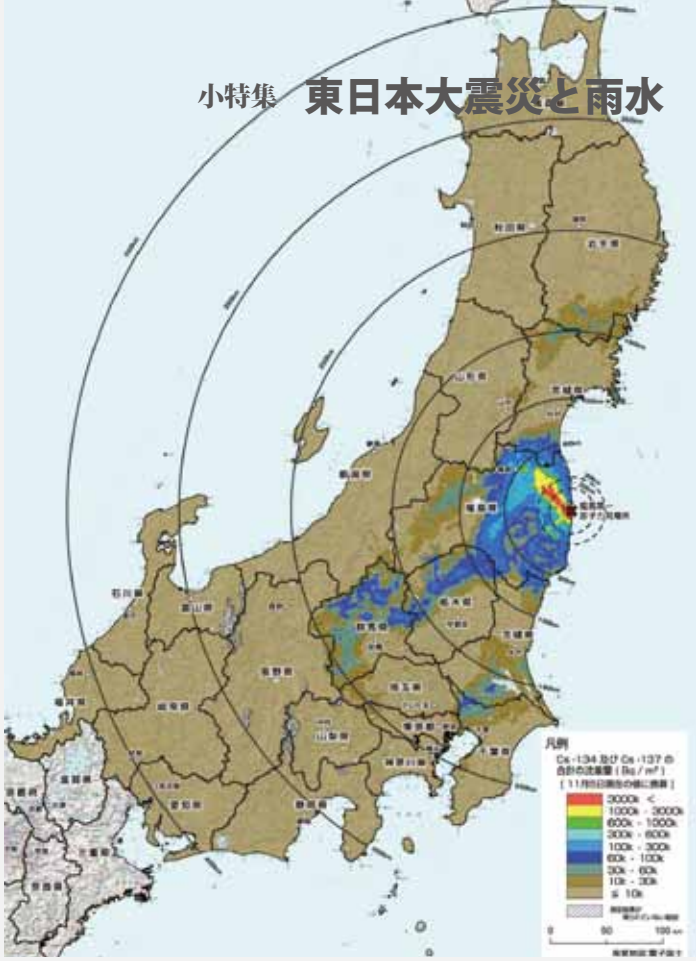


図 3　東日本全域の地表面におけるセシウム 134、137 の沈着量の合計
（文部科学省による第 4 次航空機モニタリングの測定結果（平成 23 年 12 月 16 日）
http://radioactivity.mext.go.jp/ja/1910/2011/12/1910_1216.pdf、2011/12/16 アクセス）

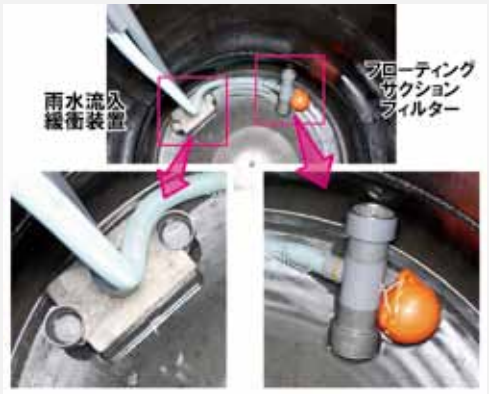


図 4　底質泥巻き上げ低減と清浄な雨水を採取するための装置例（ホームセンターにある商品を使って筆者が自作した例）

安心な雨水活用のワンポイント！

あなたの使っている雨水は、水道水のように透明で濁りがなく澄んでいますか？ペットボトル等の透明な容器に入れて水道水と比べて下さい。底質泥の巻き上げを低減し、できるだけ澄んだ雨水を利用するための工夫の例を図 4 に示します。雨水流入緩衝装置は、貯水タンクに流入する雨水の流れ方向を反転させて上向きにすることで底質泥の巻き上げを低減させます。また、フローティングサクションフィルターは雨水タンク内に雨水が有る状態では水面に浮き、常に水面から 10cm 程度下の雨水タンク内で最も清浄な雨水を取り出すための装置です。このような装置はホームセンターで販売されている商品の組み合わせでも D.I.Y. することができ、比較的安価にできる底質泥巻き上げ対策として有効です。

8/6　エスカーションで見学したJR大阪駅。大きな屋根が特徴で、雨水活用を導入し、屋上緑化や雑用水に利用。

8/6　環境学習プログラム「雨のおもしろ実験サイエンス・ショー」。雲から雨、蒸発。雨は固体・液体・気体と3つの姿に変化するとき、思わぬ驚きが…

8/5　会場のドーンセンターホール前で行われたポスターセッション。高校生が実践している雨水活用について発表。

8月5・6日　大阪ドーンセンター

第4回雨水ネットワーク会議全国大会 2011in 大阪を終えて

関西の雨水ネットワークの基盤をさらに広める

第4回雨水ネットワーク会議全国大会 2011in 大阪実行委員会 事務局長
久保 正年（関西雨水市民の会 副会長）

はじめに大会開催に当り、ご協力を頂きました方々に改めて心より感謝申し上げたいと思います。

本大会の成果は、大きく二つありました。一つは、水への意識がそれほど高いとは言えないこの大阪で、2日間で約630名もの人々（その約20%が次世代である子ども達）に雨水活用・水の大切さを直接アピールすることができた事です。二つめは、様々な水に関する団体が集まり共に考え行動したことで、関西での雨水ネットワークの基盤ができた事です。活動手法は違えど水への思いを同じくするそれぞれの団体が、今後　協力・連携し、より広がりを持った活動を行うきっかけになったと思います。

次に課題ですが、第一は資金調達です。本大会は、行政からの資金援助が全く無く、資金集めが難航した場合は、すべてが手弁当、加えて参加団体が自己資金を投入しなくてはいけないという状況で、無謀とも言えるスタートでした。結果的に多くの方々や企業のご協力を頂き良い結果となりましたが、実行委員会の多大なリーダーシップと努力がなければ実現できなかったと思います。第二は、行政と連携した継続的な地域活動の強化だと思います。地域に根ざした活動の根幹となる人・組織を育てるシステムづくりやその人・組織の活動への支援が必要で、そのために、雨水活用の必要性をさらに行政に認識していただくことが重要であると思います。

最後に、雨水活用が地域から流域に世代を越えてより一層広まるよう、さらなるご協力を皆様にお願いし、大会のご報告とさせて頂きます。

雨水に感謝！！ ◎

8/6　上流と下流がお互いに思いやる「流域知水」の運動の提言や雨の環境学習を進め雨水キッズを育てる運動などを「大阪宣言」した。
また、福島第一原発事故により、雨により放射能が拡散し、雨水が悪者扱いをされてしまったが、「雨水の汚名を晴らす」ため、安心安全な活用方法や技術の普及を進めるなど、緊急提言をした。
※RNJウェブに全文掲載。http://rain-net.jp

大　阪　宣　言

私たちは、今回の「第4回雨水ネットワーク会議全国大会 2011 in 大阪」の成果を踏まえ、洪水に、災害に、渇水に強い街づくりを流域全体で考え、雨水活用の考え方を着実に社会の仕組みに根付かせるため、以下のように宣言し、雨水のネットワークを活かし、今日から流域全体で活動を開始します。

1. 飲水思源（注1）の発想に学び、下流が上流の水源に感謝し、上流が下流の水系の洪水を思いやる、「流域知水（注2）」の運動を提唱します。
2. 流域全体で、“雨水活用”による水源の自立を目指し、また、その水源を利用して緑を保全し、雨水を積極的に浸透させ、流域に豊かな水循環を取り戻します。
3. “雨水活用”を促進するための法制度や社会制度づくり、“雨水活用”の技術の発展や製品の規格化を推進する活動を展開します。
4. 内外の先人たちの知恵と文化を掘り起こし、「流域知水」の取り組みに活かしていきます。
5. 雨水のネットワークを活かして、流域や流域間での交流を深め、雨の環境体験学習プログラムによる雨の環境学習を推進し、地域や学校で雨水キッズを育てます。
6. 酸性雨や雨の汚染は、私たち人間が原因です。この現実をしっかりと受け止め、汚染の元を断ちきり、未来にきれいでおいしい雨水を伝えます。

以上

（注1）水を飲むときには水のもととなる水源のことを考えるという意味
（注2）流域の渇水及び洪水対策は、地域から流域全体の水のことを知ることから始まるという意味

2011年8月6日
「第4回雨水ネットワーク会議全国大会 2011 in 大阪」参加者一同

8/6 「流域知水」の運動や雨の環境学習など大阪宣言、さらに原発事故を受けた緊急提案「雨水の汚名を晴らす！」をして、大会が終了した。企画運営をした実行委員会のメンバー。

Rainwater Network JAPAN

大阪大会報告 及び 第 5 回大会の東京開催に向けて

雨水ネットワーク会議世話人会　雨水利用事業者の会会長 **大西 和也**

昨年 8 月 5、6 日に、大阪城の近くのドーンセンターで「第 4 回雨水ネットワーク会議全国大会 2011in 大阪～琵琶湖から広がる流域での雨水活用～」が開催されました。

この大会では、健全な雨水の循環の保全のためには、利用だけでなく、流出抑制のための一時貯留、雨を地球に還すための浸透・蒸発散、これら全てを包括した『雨水活用』を、“ 流域 ” という単位でどのように広めていけるのかがメインテーマとして取り上げられました。また、次世代を担う子どもたちに伝え、活動を繋げていくことをテーマとして取り上げ、子ども向けの環境学習も行われました。

大会は、力づくで地球温暖化を進めようとする悪者に、子どもたちと環境戦士エコレインが立ち向かう、エコレインショー「いっしょに守ろう！皆の地球 ～水を大切に～」で幕を開けました。国内外の雨水利用動向や流域での雨水管理、昨年日本建築学会から出版された「雨水活用建築ガイドライン」に関する基調講演、韓国や日本でも雨水活用の事例などを取り上げた、雨水活用の映像ドキュメンタリー「生きている雨水」の上映、大阪ステーションシティでの雨水利用や雨水を活かした嵐電沿線の協働緑化プロジェクト、学校への雨水タンクの設置とそれを活かした環境学習といった事例報告が行われました。また、それに加え、今回のテーマの 1 つでもある子ども向け環境学習も実施され、夏休みとあって多くの子どもたちが参加し、雨水について楽しく学びました。

2 日目は、「流域雨水ネットワーク」「雨水活用法制度」「雨水活用のアジア交流」という 3 つのテーマで分科会が行われ、その内容が全体会で報告されました。それを受けて今後の雨水活用普及活動の骨子となる「大阪宣言」を行い、流域全体で活動を進めていくことを誓いました。

つづいて、昨年の東日本大震災によって発生した “ 福島第一原発事故 ” によって、放射性物質で汚染され悪者のレッテルを貼られる形となった『雨水』の汚名を晴らすため、雨水ネットワーク会議全体で、また参加者 1 人ひとりが行動していかなければならない内容を「緊急提案」として投げ掛け、それらの活動を継続的に行っていくことを確認しあい、2 日間に渡る大阪大会の幕を閉じました。

これまでの全国大会は、東京、福岡、松山、大阪と続き、それぞれの地域に根付いた課題をもとに、新たな歩みを始める契機となりました。雨水ネットワーク九州の盛り上がり、松山市、高知市での新たな市民団体の発足といった様々な成果を生み出しています。

＝緊 急 提 案＝
「雨 水 の 汚 名 を 晴 ら す ！」

私たちは、福島第一原発事故による放射能汚染をとても心配しています。今回の原発事故によって、大気中に放出された放射性物質を含んだ雨水が、大地に、川に、海に、私たちの街に降り注ぐ結果となってしまいました。

でも、雨水は健気に放射性物質で汚染された大気を洗ってくれているだけなのです。雨水が大地や川や海を汚染するのではなく、雨水自体が放射性物質によって汚染されてしまったのです。

大気を洗うという大きな役割を果たした結果、汚染されてしまった雨水を悪者のように扱うのは、非常に残念なことであり、間違った行為と言えます。雨水は “汚染” という濡れ衣を着せられたに過ぎないのです。太古から生命を育んできた雨水が、未来の人々や生き物たちの生活環境を脅かすものと誤解され、嫌われてしまうのは、雨水活用の普及に関わる私たちだけではなく、全ての人々にとって大変悲しい事態です。

また、空からの恵みである雨をその場で受けとめて貯留、浸透、利用する雨水活用は、遠方のダムなどから水を引いてきて、浄水場で処理して家庭に送水する水道水に比べ、膨大なエネルギーを必要としません。私たちは、今回の原発事故を契機に、安心で安全かつ持続可能な社会を実現していくために、雨水活用をエネルギーという観点からも見直す必要があります。

私たちが今すべきことは、雨水が被ったこの汚名を晴らすこと、間違った情報を正すことなのです。雨水活用を広める活動をしている私たちだからこそできることを、今すぐにでも始めましょう。エネルギーという観点からも雨水活用が有効であることを大いに広めていきましょう。

今回の全国大会を起点として、放射能汚染などによる雨水の汚名を晴らし、雨水活用のさらなる普及を図るために、今大会の参加者 1 人ひとりが、また雨水ネットワーク会議全体で、以下の活動を継続的に行うことを提案致します。

1．安全かつ安心な雨水活用方法や技術の普及と開発を促進する
2．雨水の水質や放射性物質について、正確な情報の整備と伝達を行う
3．エネルギーという観点での雨水活用の有効性の啓蒙と普及を促進する

以上

2011 年 8 月 6 日
第 4 回雨水ネットワーク会議全国大会 2011 in 大阪実行委員会

第 5 回全国大会 東京での開催が決定！

東日本大震災発生から早 1 年・・・今年第 5 回目となる雨水ネットワーク会議全国大会は、東日本大震災の被災地のひとつでもある『東京』で開催することに決定されました。　天からの恵み「雨」。しかし東日本震災以降不安の対象となってしまった「雨」。「雨」は循環することで、様々な生き物や我々人間の “ いのち ” を育み、支えている。この「雨の循環」に “ いま ” 起きていることを改めて見つめ直し、“ あした ” につながる「雨の循環」を作り出していこうという思いを込め、「いのち育む雨循環　いま～あした」と題して開催します。

雨水ネットワーク会議発足後、最初の節目ともいえる大会として、『雨水活用』を見て、知って、考えてもらう機会として、より多くの方々にご参加頂ける様、様々な方のご協力を仰ぎながら、有意義な大会となるよう計画を進めて行きます。多くの方々のご参加をお待ちしております。

第 5 回 雨水ネットワーク会議全国大会 2012 in 東京
テーマ：「いのち育む雨循環　いま～あした」

日時：2012 年 8 月 4 日（土）～ 5 日（日）
主催：第 5 回　雨水ネットワーク会議全国大会 2012 in 東京　実行委員会
会場：8 月 4 日（土）　全国大会（会場調整中）
　　8 月 5 日（日）　エクスカーション：都内雨水施設見学
連絡先：第 5 回雨水ネットワーク会議全国大会 2012in 東京・実行委員会事務局
　　E-mail　5thrnj@gmail.com　（渉外担当：大西）

朝晩2回、30分ほどかけて池まで水を汲みに行くのが彼女たちの日課

農村の女性たち。安全な水の確保への関心は非常に高い。

REPORT

バングラデシュ・スカイウォーター・プロジェクト

「JICA 協力準備調査（BOP ビジネス連携促進）」進行中。

より多くの人に安全な水へのアクセスを実現するために

雨水市民の会会員・（株）天水研究所プロジェクトマネージャー **笹川 みちる**

雨水市民の会では、2008年から2010年にかけて三井物産環境基金の支援を受け、バングラデシュにおける安全な飲み水の確保[*1]のための持続可能なスカイウォーター・プロジェクトに取り組んできました。その成果を引き継ぐ形で、2011年からは村瀬理事が設立した（株）天水研究所がJICA（独立行政法人国際協力機構）BOPビジネス連携促進調査として天水活用プロジェクトをバングラデシュで展開しています。このプロジェクトは、天水活用を持続可能な取り組みにしていくためにソーシャルビジネスの手法を取り入れ、将来的には、天水活用を地域の産業にしていく狙いを持っています。このプロジェクトは、㈱天水研究所と㈱パデコの協働事業ですが、佐藤理事、会員の鎌田氏及び笹川がプロジェクトに参画しています。2011年4月からすでに4回の現地調査を実施（2012年3月時点）し、2011年10月には、私（笹川）も初めて2週間の現地調査に同行しました。

JICA協力準備調査（BOPビジネス連携促進）とは

世界には年間3,000ドル未満で暮らしている貧困層（BOP：Base of the Pyramid）が約40億人いるといわれています。JICAでは、開発途上国の課題の解決を目指して、BOP層を対象にしたビジネスに取り組む民間企業等を開発パートナーと位置づけ、連携を促進するための準備調査を2010年度からスタートしました。その第1回の調査対象のひとつとして「マイクロクレジットシステムを取り入れた雨水タンクソーシャルビジネス実現可能性調査」が採択され、2011年3月～2013年9月の予定で、調査を行っています。

バングラデシュ・プロジェクトによるオリジナルの雨水タンク「AMAMIZU」がならぶ製造工場（上）と、設置された「AMAMIZU」（下）。

ローコストタンク「AMAMIZU」の開発

これまで雨水市民の会が現地事務所を開設し、現地NGOと共に開発・普及に取り組んで来たコンクリートリングタンクは、4,400ℓで20,000タカ[*2]（18,500円）という価格で、現地では学校教師や公務員といった中流以上の人々でなければ手が出ないのが現状です。このタンクの価格をおよそ3,000タカ（2,775円）に抑えることをめざして開発されたのが、タイの伝統的雨水タンク「ジャイアントジャー」の技術を応用したモルタル製の一体型タンクです。2011年4月から、2人のバングラデシュの左官工が、タイでの約1ヵ月の技術研修に参加、身につけた技術を活かして650ℓと1000ℓの２つのサイズのジャーが完成し、「AMAMIZU」と名付けられました。現在は鎌田会員の技術指導のもと、製品としての品質基準作りや製造のスピードアップ、新たな職人の育成にも取り組んでいます。

2011年秋には、プロジェクト実施場所となるクルナ管区バゲラハット郡モレルガンジにAMAMIZU製造工場が開設されました。工場はフェリーの船着き場から徒歩30分程で、町の中心部へ向かう人や乗り物が前を行き交うところで、現地ではすっかり有名になり、大人も子どもも興味津々で製造の様子を見守っています。

モレルガンジでの第3回現地調査に参加

私は、2011年10月下旬に約2週間の現地調査に参加。初めて訪れた沿岸地域は首都ダッカから車とフェリーでおよそ9時間、田畑や養殖池が並ぶのどかな農村地帯ですが、2007年のサイクロンシドル、2009年のサイクロンアイラによって大きな被害を受けた被災地でもあります。

現地調査では、AMAMIZU製造販売のビジネスモデル構築の決め手となる販売価格と販売システムの決定に向けて、現地マイクロクレジット機関[*3]へのインタビューや住民へのヒアリングを行いました。

現地スタッフが取り組んでいる戸別インタビューも300件を終え、水問題の実態や雨水利用への関心度が明らかになって来ています。調査の結果、3,000タカという価格設定であれば、今回のターゲットとなるBOP層の約半数が購入可能であることがわかってきました。分割払い等も取り入れれば、購買層はさらに広がると考えられます。

AMAMIZUソーシャルビジネス実現に向けて

バングラデシュは5月下旬には雨季に入り、雨水タンクのニーズがいっそう高まります。そのタイミングに合わせて、バングラデシュの政府関連機関や国際援助機関向けの英文パンフレット、タンクの購入者となるBOP層に向けたチラシ制作やワークショップの企画等も進行中です。目標は、2020年までにAMAMIZUを15万基普及させることです（約90万人の飲み水となります）。現在バングラデシュ沿岸地域の人口約3,700万人のうち約2,000万人が安全な飲み水を得ることができないでいると言われています。この目標が達成すれば2,000万人の約5%の人たちが安全な飲み水を確保できることになり、バングラデシュ社会全体に大きなインパクトを与えられると期待されています。

*1　安全な飲み水の確保が困難：バングラデシュは飲料水を地下水や池の水に頼っているが、地層のヒ素の影響や塩害化の進行などで、安全な飲み水を得ることが難しいと言われている。

*2　1タカ＝0.925円（2012年2月レート）

*3　マイクロクレジット機関：貧困層の女性を対象に、起業の元手となる少額の資金を無担保で融資する機関。

すみだ環境ふれあい館 開館 10 周年だより

墨田区のすみだ環境ふれあい館がオープンして昨年で 10 年を迎えました。雨水市民の会は 2008 年度より館の管理運営業務を受託し、日々運営に努めています。区長委嘱による当館の企画運営委員会で会長を務める阿久沢八代さんに、この 10 年を振り返って寄稿していただきました。

自然といのちのふれあいが輪を広げ、夢をつなぐ

すみだ環境ふれあい館企画運営委員会　会長　**阿久沢八代**

すみだ環境ふれあい館は墨田区の環境学習拠点として、廃校を利用し 2001 年 5 月に開館しました。展示準備も不要材などを利用し、職員やスタッフが一丸となって完成させた施設でもあります。館内の「雨水資料室」には区内学校は勿論、専門家や海外からも多くの方が訪れていますが、区民には入りにくくて何をやっている所かわからないなど、周知度は極めて低い状態でした。

しかし、オープン 2 年後には墨田区出身の関野吉晴さんの探検資料室が増設され、2008 年からは雨水市民の会が管理運営業務を受託し、体験型の環境プログラムもさらに充実されてきています。2011 年 10 月に実施された 10 周年記念「ふれあい館まつり」は、子どもたちも楽しめ、1200 人余りの人たちが訪れ、企業・団体・個人の繋がりを深める良い機会になりました。

オリジナルの体験学習の企画も充実してきました。「よりどりミドリ・プロジェクト」では、参加者が種から育て、生ごみの堆肥、灌水は雨水を利用し、生育から収穫して食すまで一連の行程が確立されるようになりました。冬ならではの企画として「こたつ」に入って遊び、食べ、環境学習をしたり、関野吉晴さんの最新の「グレートジャーニー」で実際に航海に加わった若者の体験談を聴くなど、自然と付合う知恵や恵みにも触れながら、大きな輪が広がってきました。

すみだ環境ふれあい館は、スタッフや関わる方たちの工夫と努力で沢山の可能性を実現できる場所になりつつあります。環境に関わる人たちが自由に訪れ、夢を置いていく、そして誰かが又それを育てていく・・そんな様子を想います。

残念なことに現在のふれあい館は墨田区の「暫定施設」ですが、今後建物の耐震工事が実施され、安心して利用可能な状態になり、早く「暫定」が外されるよう願っています。

この 3 月から一部リニューアルされ、「循環の部屋・つながるーむ」ができました。地球全体から個々のいのちまで「つながっている」という視点で身近なものにとらえることができます。ここに来れば触れるものがある、なるほどと納得できるものがある、新しい発見がある、人とのつながりがある。そんな環境ふれあい館になる夢を実現できるよう、少しだけでも力になりたいと思っています。

エネルギーの課題に向かって

「循環の部屋・つながるーむ」では、これまでの展示でも取り組んでいた、現代文明の石油エネルギーへの依存についての考察を踏まえ、原発事故でも社会に強く認識されることとなった、これからの人類のエネルギーの課題についても見据え、未来をみなで思考する場として継続的な取組みをしていきたいと考えています。

常設展示のリニューアル

「循環の部屋・つながるーむ」ができました！スタッフ一同も手作りで制作した労作です！

http://www.fr-kan.org/
スタッフがつくるウェブサイト。ブログも！

すみだ環境ふれあい館

〒131-0044 墨田区文花1-32-9（旧文花小学校）
開館時間●10:00～17:00（入館は閉館30分前まで）
休　館　日●月・水（祝日は除く）、年末年始（12/29～1/3）
TEL：03-3611-6355

スカイツリーに行く？…なら、ふれあい館にも寄ってみよう！

振り返るあゆみ

ふれあい館スタッフからのサイドコラム

運営５年目へ！

雨水市民の会が館の運営業務をスタートして丸 4 年となりました。展示をスタッフがガイドいたします。ぜひご来館ください！

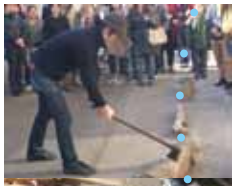
雨水資料室

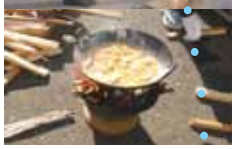
日本でも唯一？有数？の当展示は、雨水活用ははじめてという方、これからやってみたいという方に、豊かで実践的な情報をご提供しています。

関野吉晴 探検資料室

人類のルーツをたどる旅「グレートジャーニー」を成し遂げた関野さんの、旅の写真パネルや装備を常設展示。今も現役で探検を続ける、その足跡も追跡します！

企画展の開催





2011 年秋からは、探検家・関野吉晴さんがその後取り組んだ、日本人の足跡をたどる「海のグレートジャーニー」。この全貌を紹介する企画展を開催。また、その中心的クルーの佐藤洋平さんによる 2 回のワークショップも実施しました。（当企画展は 2012 年 5 月 13 日まで。）

雨の絵本ひろば

何と言っても雨水市民の会が、月に 1 度続けているこのプログラム。今ではすっかり地域の子どもたちの集まる人気の催しとなりました！

ふれあい館まつり

年に 1 度、秋に行うふれあい館まつりは、環境学習にまつわる関係の団体がみんな集まって、それぞれの成果を披露したり体験コーナーを展開したり、と大にぎわい。昨年は探検家・関野吉晴さんのドキュメンタリー映画「僕らのカヌーができるまで」を上映。

ワークショップ

体験性を重んじたプログラムの充実を図り、地域にも定着しています。特に夏休みのワークショップ・シリーズは募集開始と同時に申込みがいっぱいになることも度々で、スタッフも一層手応えを感じてきています。（詳しいメニューは P14 の活動報告に掲載。）

よりどりミドリプロジェクト

2011 年度は、墨田区民のグループ「生ごみ減量作戦ふたばの会」とふれあい館が共同して、生ごみたい肥を活用した土作りから、緑のカーテンの栽培、収穫・調理まで年間を通して実施。収穫したゴーヤのカレー作りでは、様々な世代の人に、楽しく、おいしく、都会の中での物質循環を体感いただくことができました。このプロジェクトでは、育成に雨水を用いることはむろん、都会の中でできるだけ環境に配慮した育て方に努め、それを実体験することを目指しています。

地域の組織・団体との連携

いつも館のプログラム実施にご協力いただいているみなさま、ありがとうございます！
ユートリヤ・スターガーデンさんとの連携プログラム「スターウォッチング」では、天体望遠鏡で土星の環をしっかりと観察しみんな大満足。ミヨシ石鹸（株）さんのソープボトル作りでも個性あふれる作品がたくさんできあがりました……etc.
これからも墨田区や環境学習に縁のある方々と出会い、コラボレーションして、ますます豊かな場を築いていきます！

あまみずカレンダー
2011年8月から2012年3月まで

ふれあい館活動

(F)は「ふれあい館企画」

●7/23 ～ 8/28(週末)　夏休みワークショップ（F）計10回を開催。合計参加者300人

7/23(土)　よりどりミドリの観察会　参加者8名

7/23(土)　雨の恵みで草木染め～オリジナルハンカチをつくろう　参加者40名

7/24(日)　見上げてみよう、すみだの星空。夏のスターウォッチング　参加者37名

7/31(日)　雨と水のおもしろ実験＆エコ工作　参加者28名

8/7(日)　知ってる？雨水利用～雨水から環境を考えよう　参加者14名

8/17(土)　レインスティック作り～雨の音をかなでよう！　参加者30名

8/14(日)　水と電気のふかーい関係～燃料電池をつくってみよう　参加者39名

8/20(土)　よりどりミドリの収穫祭～ふれあい館産の野菜を食べよう！　参加者33名

8/21(日)　太陽パワーを集めよう～かんたんソーラークッカー作り　参加者40名

8/28(日)　せっけんから身近なエコライフ～マイソープボトルをつくろう企画実施：ミヨシ石鹸（株）　参加者31名

●9/4(日)　里いも観察会　里いもの植え付けから当日までの成長の具合を報告し、実際に里いもプランタの観察を行った。参加者4名

●9/18(日)　雨の絵本ひろば「野菜スタンプでアート」ニンジン、ピーマン、オクラ、レンコンなど身近な野菜を使ったスタンプで自分なりの作品を作った。それぞれが個性的な作品に仕上げた。参加者5名

素敵な花が咲きました。

●10/8(金)　ヘチマのたわしを作ろう（F）

●10/15(土)　ふれあい館まつり（F）　ナチュラルクリーニング・せっけんと重曹の使い方などのワークショップ、雨水ティーサービス、空飛ぶタネの実演等のショートプログラムが行われ、地元の人たちが続々訪れた。さらに、ドキュメンタリー映画「僕らのカヌーができるまで」上映。http://bokuranocanoe.org/日本人の祖先の足跡を辿る「新グレートジャーニー」最終章の序章となる、関野さんと学生たちのものづくりの記録。探検家・関野吉晴さんのトークショーも行われた。参加延べ1,238名

●10/16(日)　雨の絵本ひろばとよりどりミドリプロジェクトの共同企画「いくつ掘れるかな？里いも収穫祭」大人も子どもも泥だらけになって、雨水で育った里いもを掘り、きぬかつぎにして食べ、さらに満足。土に触る機会が少ない子どもたちにはよい経験に。参加者34名

見事な成果である里芋を前に、汗をかいて晴れやかな顔々。

●11/20(日)　雨の絵本ひろば「クリスマスリース作り」　ゴーヤや朝顔のツルを使ってのリース作り。ツルを幾重にも巻いてリースの形を作るのはちょっと難しかったが、飾り付けにそれぞれの個性が…。参加者６名

同じ素材を使ってもオリジナルなリースが完成。得意顔で記念撮影。

●12/18(日)　雨の絵本ひろば「クリスマス音楽会」　講師の笠井玉喜さんによるバイオリンに合わせて歌ったり、ゲームをしたり、楽しいひと時を過ごした。笠井さんは、さすがに子どもを楽しませるプロ。あっという間に時間が過ぎてしまった。音楽会のあとは恒例のお茶会でゆったりとした時間を過ごした。参加者22名

「音のサプリメントをお届けします」をキャッチフレーズに様々なところに音楽の楽しさを届けている笠井玉喜さん。

●1/21(土)　冬のスターウォッチング(F)協力：すみだ生涯学習センターユートリヤ・スターガーデン。参加者4名

●1/22(日)　エコたつあそび～こたつdeワークショップ（F）　企画実施：リードクライム(株)

●2/19(日)　雨の絵本ひろば「ゲーム大会」　絵本の読み聞かせと雨水ゲーム。参加者５名

●3/18(日)　雨の絵本ひろば「ふしぎな絵本づくり」　絵本の読み聞かせと雨水ゲーム。参加者６名

企画展と関連イベント

●企画展「海のグレートジャーニー展～日本列島にたどり着いた人類の軌跡。インドネシアから石垣島4,700km」10/13 ～ 5/13　探検家・関野吉晴が若者とともに挑んだものづくりと航海の軌跡を、実際に作られ、使われた道具とドキュメント写真で紹介。砂鉄からたたら製鉄で作った斧、その斧による木の伐採、船造り、縄の材料探し、木の実の保存食作りなど、先人の手仕事を追体験した貴重な記録を展示。

●1/28(土)　トークミーティング（F）　ゲスト：佐藤洋平。探検家、関野吉晴と旅した20代クルーがあしかけ4年に及ぶ旅の軌跡を語った。参加者16名

●2/12(日)　スペシャルワークショップ（F）　ファシリテーター：佐藤洋平(海のグレートジャーニークルー）　薪割りや船上で食べていた煮魚料理に挑戦し、鉄の作り方や船上生活、旅の楽しみや苦労についてきいた。

すみだ環境ふれあい館「循環の部屋・つながるーむ」完成！

環境学習室のリニューアルが墨田区から雨水市民の会に委託され、松本理事が総監督としてふれあい館スタッフらとともに一連の作業を進め、３月末に完了。地球上の水・生命・エネルギーの循環の姿、それらと私たち人間との係わりを壁面や四角柱を使って紹介。地球がもつ驚くべきメカニズムや豊かさ、あるいは危うさを、自分自身に引き付けて感じ考えてもらおうというもの。是非一度ご観覧ください。

雨塾

「雨塾」は、市民の会が主催する、雨水活用の先端事例等を学び合うセミナー・シリーズ。2011年度は２回開催した。

●12/4(日)　第1回「雨水は甘い～バングラデシュのＡＭＡＭＩＺＵプロジェクト報告」

講師：村瀬誠。ヒ素汚染と塩害で飲み水確保が難しくなっているバングラデシュでの雨水タンク普及事業。インストールメントによるタンク普及は返金も順調にされている。課題である低所得層への普及を実現するため、タイの技術を導入して、より安価な雨水タンクを開発し、バングラデシュ工場での試作に成功。2012年早々から、事業化していきたいと考えている。この手法は、他国でも使えるので是非バングラデシュで軌道に乗せたいと、村瀬氏の夢がふくらんでいる。「AMAMIZU Innovation」（JICAの協力のもと現地NGO制作のDVD）も鑑賞。詳細はP12を参照。参加者14名

●2012/2/4(土)　第2回「エコビレッジ～自然・人間・技術の調和を目指して」

講師：佐藤清。近代建築で押しやられた、自然とうまく付き合っていた昔の技術を復元して実験するエコビレッジとして、埼玉県東松山市の古民家を改修している。自然光、雨水等を活用してエネルギーはゼロ、自然に還る素材を基本にして、温故知新の住まい方と建築技術を見せる場所とする。杉皮で葺く母屋の屋根、石灰モルタルとタイルで仕上げる地下の30トンの雨水タンク、薪による土間のヒーティング、蔵の棟は「芝棟」で緑化、自然光や自然の風を有効に使うなど、手法は多種多様である。また完成後の運営に参画したい人を募るため、地域のイチゴ農家や養蜂家などとの連携を模索中。24年中に完成予定。参加者14名

蔵の屋根に芝棟を乗せる。江戸時代から昭和初期まで、どこでも見ることができた。ユリ、岩ヒバ、ねぎぼうず等を植える。

他会場での活動

●8/20(土)　雨水探検隊「水元公園」　講師：宇田川宏。「石けんの木」「カワセミ」「トンボ」「チョウチョ」「バッタ」のお話を聞いたり、「セミ」の抜けがらを拾ったり、広い公園を時間の許す限り歩いた。参加者9名

●10/1 - 2(土・日)　すみだまつりにて手作りタンクプロジェクトによる展示。墨田区錦糸公園の体育館で、手づくりタンク、雨葉、当会のパンフレットや本等の展示・紹介とクイズラリー。2日間で約300名が訪れた。

●10/8(金)　雨水探検隊「緑と花の学習園」と「すみだの生きもの」のスライドによる学習　講師：山田和伸。山田さん撮影「すみだの生きもの」のスライドと「緑と花の学習園」でのお話。参加者12名

●12/10(土)　雨水探検隊「カレーライス作りと雨水クイズ」　墨田区立外手小学校 家庭科室にて。カレーライスの具の大きさ・形がバラバラだったが、美味しくできた。雨水クイズは、降水量・貯水量・利用法などを知った。景品もあり盛り上がった。参加者20名

●12/23(金・祝)　国立市雨タン見学会　会員の谷口淳一さんの案内で、学園都市の東京・国立市で手作り雨水タンクを広める活動を見学。参加者5名

●3/26-29(月-木) すみだNPOフェスティバルに参加

会議

●理事会　9/25(日)、11/12(日)、12/23(金・祝)、2012/2/18(土)

●市民活動・ふれあい館担当委員会　9/25(日)、2012/2/10(金)

雨水ネットワーク会議

●8/5-6(金･土)　第4回雨水ネットワーク会議全国大会2011in大阪　2日間で634人が参加

●雨水ネットワーク会議　世話人会　10/14(金)、11/24(木)

●2010年に第3回雨水ネットワーク会議全国大会を実施した松山市で「雨水を上手に活用しながら空にかえす」雨を育てる新しい生活スタイルを考え、提案することをめざして、**「雨水楽舎」(あまみずがくしゃ)が誕生**。ＨＰ：http://ameame-p.net/

●2/4-5(土・日)　第2回雨水ネットワーク九州in長崎　～雨水を活かした循環する社会をめざして～

●2/11(土)　雨水ネットワーク高知設立記念イベント

予定

●第5回 雨水ネットワーク会議全国大会2012 in東京　テーマ：「いのち育む雨循環　いま～あした」
日 時：2012年8/4(土)・5(日)
連 絡 先：実 行 委 員 会 事 務 局
E-mail　5thrnj@gmail.com
(渉外担当：大西※詳しくはP11参照)

新刊紹介

昨年は、日本建築学会と(社)雨水貯留浸透技術協会から雨水活用に関する出版が相次ぎましたので、ご紹介致します。

「雨の建築道」

日本建築学会 編　技報堂出版(株)発行
ISBN978-4-7655-2549-7　2,800円＋税

「雨の建築学」(哲学)、「雨の建築術」(技術)に次ぐ三作目。家庭からまちづくりまで、雨水の利用用途ごと必要なポイントやその方法、具体的な装置などを分かりやすく解説しています。雨水利用を深め究めたい方には、是非お勧めです。

「日本建築学会環境基準 AIJES-W0002-2011 雨水活用建築ガイドライン」

(社)日本建築学会 発行
ISBN978-4-8189-3617-1　1,600円＋税

今後必須となっていく、雨水を「かりる」「かえす」「つくる」ための建築の、考え方の基本から実践までを「設計」・「製品」・「施工」・「運用」の形でまとめた、雨水活用建築のためのバイブルとも言える一冊です。

「雨水活用建築製品便覧(CD-ROM版)」

(社)雨水貯留浸透技術協会 発行 1,500円(税込)

雨水活用建築ガイドラインの参考書ともいえるこの便覧。雨水活用建築を実践するために必要な製品を、部位ごとに掲載。地域別の雨水活用ポテンシャルの解説や全国の自治体別雨水利用等の助成制度等資料も充実しています。

トピックス

ライオン・雨活アイデアコンテスト2011 受賞者決定

当会のすみだ環境ふれあい館の子ども向けワークショップや雨水ネットワーク会議などの支援をしている、ライオン株式会社。昨年6月から募集していた、雨活アイデアコンテストの結果発表が11月にありました。村瀬理事が審査委員の一人を務めています。6,099作品もの作文や図面、研究レポートなど小・中学生たちの多彩で独創的な提案から67作品が入賞。最優秀賞、優秀賞をウェブで公開しています。

http://www.lion.co.jp/ja/csr/social/rain/contest/result.htm

東京スカイツリーに先駆け、雨水活用の「駐輪場」オープン！

墨田区の「押上駅前自転車駐車場」が4月1日、オープンしました。ツリー開業で利用者の増加が見込まれる玄関口としての押上駅前にあり、建物屋上部分がスカイツリーを眺めながら過ごせる憩いスペースとしても利用できるよう整備が進んでいます。実はこの施設、雨水活用を含めた環境配慮建築であることは必見。システムを案内するパネルも設置されています。夏の雨水ネットワーク会議全国大会のエクスカーションでも、コースにこの施設見学も取り入れる予定です。

世界の空と人をつなぐ あまみず
no.58
2012 年 4 月 15 日発行

発行 特定非営利活動法人 雨水市民の会
NPO People for Rainwater
理事長　山本耕平
〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1
TEL: 03-3611-0573　FAX: 03-3611-0574
http://www.skywater.jp/
E メール　office@skywater.jp

編集長　高橋朝子
編集委員　青山匡希
大沢幸子
大西和也
神谷博
村瀬誠
デザイン　EH

編集後記

3月11日から1年が過ぎました。森は海の恋人で知られる気仙沼の畠山重篤さんも被災されました。養殖の牡蠣はすべてダメ。筏づくりから始め、冬には少しですが、牡蠣を出荷できたそうです。しかし、まちは流され、高台に集団移転するかどうか議論しても、なかなかまとまりません。そんなときに埋め立て地が地震で沈下して、再び湿地帯になったところに、小さいアサリが見つかりました。それをみたまちの人たちは、「そういえば昔ここでアサリ採りしたなあ」と、自然の回復を健気に感じ、被災したまちを自然に戻そうと意見が一致して、集団移転がまとまったそうです。

大津波にひとたまりもなく浚われた家々や工場。しかし、津波でかき回され汚れた海は、確実に回復しています。これからは、自然に寄り沿うような暮らし方が必要なのでしょう。雨を捨てずに、溜めて活用したり、地面に浸透することは、誰もができることです。今回の特集は、身の丈の雨水活用の実践をする市民たちを取材しました。身近な地域で、自分の工夫で、お互いが雨水活用を広める。そんなささやかですが、エコで、災害にも役立つ雨水活用をあなたもやってみませんか。(Mo)

雨水市民の会 入会案内

●正会員：入会金＝ 2,000 円
年会費＝個人　6,000 円
団体 30,000 円
●賛助会員：個人・団体とも
1 口 3,000 円
●学生会員：3,000 円
会員には、本誌「あまみず」を送付するほか、各種イベント・雨水関連情報をお知らせします。

詳しくは、事務局までお問い合わせください。
TEL: 03-3611-0573
FAX: 03-3611-0574
ホームページにも掲載しております。
http://www.skywater.jp

『雨の詩集』を出版しました。

編集：雨と文芸チーム　B5 判　86 頁　頒価 500 円

『雨の詩集』（「雨と文芸」第 5 号）が、昨年 7 月に出版されました。39 人の日本の詩人たちの、素敵な「雨」の詩を掲載しています。

掲載詩のページ下に置いた 800 字ほどのプロフィールは、各詩人の思いがけない横顔や代表詩の紹介など、読みごたえがあるとの評価をいただいています。編者が独自に雨の多様さを考察・紹介したページや雨の詩のリスト、コラムもあります。

「現代詩はむずかしい」と、よく聞きますが、詩の中に「あ、この表現、好きだな」という部分を見つければまずはいいのだそうです。気楽に楽しんでいただければと思います。

掲載した最初の詩は、山田今次さんのひらがなばかり 18 行におよぶ「あめ」という詩です。

「あめ　あめ　あめ　あめ /　あめ　あめ　あめ　あめ /　あめはぼくらを　ざんざかたたく」リズム感のあふれる、「さあ、来い」と雨に立ち向かうような頼もしさの感じられる詩です。

次ページのまど・みちおさんの「雨がふる日には」は、少し優雅で哲学的です。雨がふる日には「雨と傘とのおしゃべりを /　頭の上にかかげて歩きます」「頭の上からなのに /　宇宙のはてからのような」雨と傘との不思議なおしゃべり。傘をさして歩き、そんな会話に耳を傾けたくなります。他 37 人の詩や、詩集のそのほかの内容をご紹介できなくて残念。是非、実物をお手にとって御覧ください。（会員には無料配布済みです。他にご希望の方は事務局にご注文頂ければ発送します。）

雨水市民の会・雨と文芸チーム　糸賀　幸子